

東京造形大学非常勤講師
担当地域：イタリア
伊藤 伶

イタリア中部ウンブリア地方フェレンティッコ近郊の谷間にサン・ピエトロ・イン・ヴァッレ修道院は建つ⁽¹⁾〔図1〕。同修道院は12世紀末頃に制作された壁画で知られており、辻佐保子教授旧蔵スライドには壁画と建築に関する64枚のスライドが残る。同修道院聖堂身廊と勝利門壁面に旧約・新約聖書サイクルなどが現存する。新約聖書サイクルは14場面構成され、20枚のスライドがある。単独場面のスライドで最も多いのは、「エルサレム入城」(5枚)〔図2〕となり、「洗足」(3枚)、「最後の晩餐」(2枚)が続く。辻佐保子氏が意図的に「エルサレム入城」を多く撮影したかは明らかではない。しかしながらフェレンティッコの「エルサレム入城」が、同時期にイタリアで描かれた図像とキリストの表現が異なる点を考慮すると、意図的であった可能性はあるだろう。本論では「エルサレム入城」を取り上げ、辻氏が同場面に着目した点を検討したい。

サン・ピエトロ・イン・ヴァッレ修道院はランゴバルト族スポレート公ファロアルド2世(在位703-20)により創設された。現聖堂は3つのアプシスをもった単廊式バシリカであり、身廊南北壁面、中央アプシス勝利門壁面に12世紀末頃にローマで活動した画家たちによる壁画を有する。南北壁面に旧約・新約聖書サイクル、勝利門壁面に燭台、神の手、キリストなどが描かれる。1981年、ウンブリア州環境・建築・芸術・歴史・文化財保護局は耐震工事などを行い、1991-95年、中央修復研究所は壁画を修復した。辻氏のスライドは壁画の状態から修復以前の撮影と考えられる。

身廊南壁面は水平に三分割され、「エルサレム入城」は南壁面中央下段に位置する。驢馬に横乗りしたキリストは正面を向いて、エルサレムの城門前に到着する。背後にはベテロを先頭に使徒たちが続く。右側の城門から棕櫚の木を手にした群衆が溢れている(マルコ11:1-11)。スライドB4_285、286のように、壮年で髯のキリストは少し傾きながら正面を向く。キリストの白地の鞍下には色鮮やかな装飾が施されており、玉座のようである。



図1 フェレンティッコ、サン・ピエトロ・イン・ヴァッレ修道院、外観



図2 エルサレム入城、フェレンティッコ、サン・ピエトロ・イン・ヴァッレ修道院聖堂、12世紀末

「エルサレム入城」の真上には「東方三博士の礼拝」〔図3〕が配される。画面左から三博士は贈り物を捧げつつ、画面右のマリアの膝に座るキリストを礼拝する(マタイ2:1-11)。聖母子の左には天使が座り、左目が少し見開いたマリアは宝石で装飾された、濃紺のマフォリオンというヴェール状衣装を被り、左手で幼児キリストを支えている。



図3 東方三博士の礼拝、エルサレム入城、フェレンティッコ、サン・ピエトロ・イン・ヴァッレ修道院、12世紀末

「エルサレム入城」のキリストと「東方三博士の礼拝」のマリアは、ローマのラテラーノ宮殿サンクタ・サンクトールム礼拝堂に納められる救世主イコンとローマの《サン・シストの聖母》イコンに倣ったと指摘された⁽²⁾。

イコンとは礼拝用の聖画像を意味する。ラテラーノの救世主イコンは6-7世紀の制作とみなされ、玉座の全身像のキリストが少し体を傾けた正面観で描かれる。このイコンは「人の手で作られたのではない(聖像)」⁽³⁾ととらえられ⁽³⁾、加筆と傷みのため、現在は壮年のキリストの顔のみが残る。ローマには複数の聖母または聖母子イコンが伝わっており、福音書記者ルカの手による真の肖像と考えられ、救世主イコンとともに崇敬を集めた⁽⁴⁾。なかでも7-8世紀の《サン・シストの聖母》や複製は「執り成しの聖母」と呼ばれ、宝石で装飾された濃紺のマフォリオンを被ったマリアは、キリストと信徒の仲介者として片手をキリストへ、もう一方の手を信徒へ向ける。この聖母の特徴として、見開いた左目も認められる。

8世紀半頃、救世主イコンは宗教行列で運ばれ始め、9世紀には8月15日の聖母被昇天祭において、ローマの各聖堂の聖母イコンとともに行列で使用された⁽⁵⁾。12世紀になると、ローマと周辺地域では救世主イコンと《サン・シストの聖母》などの聖母イコンが複製され、宗教行列とともに各地に普及した⁽⁶⁾。

フェレンティッコのキリストは玉座の全身像、少し体を傾けた正面観が、救世主イコンと共通し、マリアはマフォリオン、左手の仕草、見開いた左目が、《サン・シストの聖母》に類似する⁽⁷⁾。イコンを模倣した聖堂壁画の前例はあるが、フェレンティッコのように新約聖書サイクルにイコンの図像を用いるのは、新しい試みであった。よって辻氏は「エルサレム入城」のキリストに救世主イコンとの共通点を見出したため、多くのスライドに記録したのであろう。

(1) G. Tamanti, *Gli affreschi di San Pietro in Valle a Ferentillo*, Napoli 2003.
(2) H. L. Kessler, "Il ciclo di San Pietro in Valle: fonti e significato," in Tamanti, *op.cit.*, p. 96; S. Romano, "Il ciclo di San Pietro in Valle: struttura e stile," in Tamanti, *op.cit.*, pp. 65-66.
(3) W. F. Volbach, "Il Cristo di Sutri e la venerazione del SS. Salvatore nel Lazio," *RendPontAcc* 17 (1940-1941), pp. 157-195; M. Andaloro, "L'acheropita," in C. Pietrangeli (ed.), *Il Palazzo Apostolico Lateranense*, Firenze 1991, pp. 81-90.
(4) 加藤磨珠枝「ローマの聖母子イコンの起源について」〔千葉大学人文研究〕33 (2004), 95-104頁。
(5) E. Parlato, "Le icone in procession," in M. Andaloro, S. Romano (eds.), *Arte e iconografia a Roma dal tardoantico alla fine del Medioevo*, Milano 2002, pp. 55-72.
(6) Parlato, *art.cit.*, pp. 55-72.
(7) Romano, *art.cit.*, pp. 65-70.

東京藝術大学非常勤講師
担当地域：フランス、スペイン、イタリア、北アフリカ
瀧本 みわ

辻佐保子教授旧蔵スライドコレクションには、1957年から1961年までのフランス留学中にヨーロッパ各地の聖堂や美術館で撮影したスライド群があります。その一枚一枚に目を通し、クローズアップされた図像や写真の画面構成を見てゆくと、佐保子先生が、各聖堂の訪問時には調査対象の作品を既に熟知し、研究用の図版として明確な構想を持って撮影していることがわかります。

また、本史料館には、スライドと共に、先生の調査対象作品への透徹した眼差しを感じることができる貴重な手帳も所蔵されています。その一部は、フランス留学中に実施した欧州各地の調査旅行や展覧会(1958年6月から1961年12月まで)での取材を、デッサンとフランス語メモによって記録したもので、合計13冊が残されています。この一連の手帳は、今でもパリの学生たちで賑わうサン・ミシェル通りの書店兼文具店Gibert Joseph、あるいはリシュリュエ通りの国立図書館旧館すぐ近くの書店(現存せず)のロゴの入った手のひらサイズのノートで、赤、青、緑など色を毎回変更しながらも、1冊(1960年ローマ滞在中の第9冊目、前冊でページ不足となり、おそらく現地で急遽調達した1冊)を除いて、揃いで購入されています。

手帳がどのようなものであったか、「1960年8-9月(第7冊目)スペイン、アルル、マルセイユ、ラングドック地方、プロヴァンス地方」を例にとって見てみましょう。

持ち主がすぐに分かるように名前と住所の書かれた扉頁(図1)には、ボブヘアの女性(佐保子先生)と、鼻に二つのホクロを持つ男性(邦生先生)の二コマ漫画が描かれています。ワンピースにロングネックレス、小さなハンドバックを持つ佐保子先生の足元には、クリュニー美術館所蔵の連作タピスリー《一角獣と貴婦人》に登場する愛らしいさぎと犬が描かれています。カメラバックを持つ邦生先生は、小動物たちと待つ佐保子先生に急いで駆け寄り、手には小さなチケットを持ち、「(Voici, deux billets!(切符2枚買って来たよ!))」と声をかけると、佐保子先生は、「(Mais non, j'ai besoin encore deux autres. (だめよ、あと



図1 手帳VII
扉ページの一コマ漫画



図2 カオールのサンティエニス聖堂北扉口の遠望

2枚必要じゃない))と怒られる、やさしくユーモラスな漫画です。

こうして列車での夏の調査旅行を目前に、その高揚感を描いた扉絵に始まる手帳の内容は以下のような構成となっています。

・(冒頭)スペインから南フランスの旅に関する事項：スペインで訪れるべき美術館と鑑賞すべき作品のリスト、北東スペインの地図と道程、南西フランスのユースホテルのリスト等。

・1960年8月18日から9月15日までに訪れた聖堂や美術館での調査メモ(イルン(スペイン)到着—マドリッド、バルセロナ経由—ラングドック地方—プロヴァンス地方—グルノーブル、リヨンを経由しパリへ戻るまで)。

・(末尾)旅行中に購入した書籍代、文献表、次回の調査先、列車時刻表、スペイン語メニューの単語帳、紹介状や美術館の許可証などアンドレ・グラパール教授(パリ大学での指導教官)に依頼する項目等の忘備録。

佐保子先生の手帳の醍醐味は、やはり、訪れた聖堂や鑑賞した美術作品を実現した際に残した調査メモです。先生の視点によって捉えられた作品描写を辿ることで、私たちはその思考過程に僅かながらも近づくことができるためです。例えば、9月6日、二人はラングドック地方のスイヤックとカオールのロマネスク聖堂巡りをしており、約50枚のスライドが残されています(図2)。カオールでの調査メモ(図3)には、サンティエニス聖堂北扉口タンパンの書き起こしデッサンとその図像内容がフランス語で記され、連筆ながらも、浮彫の人物像やモチーフ、その配置が事細かに描写されています。この美しいロマネスク聖堂のタンパンは「キリストの昇天」と「聖ステファヌス伝」を組み合わせた図像が特徴的ですが、デッサンでは、翼と手を大きく広げて緩やかにのけ反る天使(図3右下)や、キリストの姿を仰ぎ見る使徒の一人(図3左下)がクローズアップされて描かれています。背を向け、キリストの昇天に立ち会うこの使徒は、タンパンを見上げ感嘆する、聖堂の来訪者の姿と重なります。画面と鑑賞者の立つ現実空間をつなぐ造形的な特質とその面白さが直筆のデッサンにおいても指摘されているのです。

また、佐保子先生のスライドと手帳を、邦生先生の手記(『空そして永遠 パリの手記V』)と照らし合わせると、カオールのタンパンの「天使の大胆な美しい曲げた姿態」についての記述と出会うことができます。聖堂扉口の前で、この天使の造形について二人が交わした会話までも聞こえてくるようです。このように、本史料館所蔵の辻佐保子先生のスライドと手帳は、美術史的な資料価値を超えた、一人の美術史家の思索や感動を伝える貴重な記録となっています。

※辻邦生先生の手記でのカオールの記述「スイヤックの駅前でソーダのみ休み、二時五十七分の列車(ガソリン・カー)でカオールにゆく。少し離れた町(帰りに遠望したときはきれいだった)。天使の大胆な美しい曲げた姿態。ここもクーボールを帽子のように二つにせ、ファサードがあり後陣の上はとがった屋根がのっている。内は広く、柱がない。川のふちで休み、広場でフォワールを開いているのを通り過ぎ、中世風の美しいヴァラント橋をみ、駅にかえり、六時八分のキャブドナック行きに乗る。」(辻邦生『空そして永遠 パリの手記V』河出書房 1984年より)

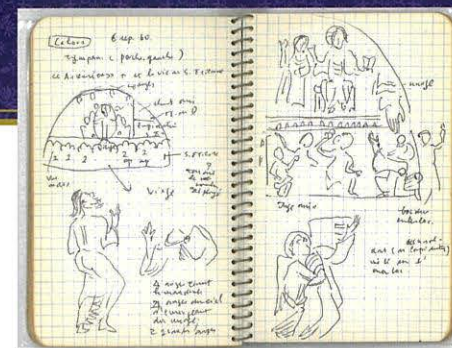


図3 手帳VII
1960年9月6日付カオールのサンティエニス聖堂扉口彫刻に関するメモ